令和元年１０月号　№516

なかま

発　　行
佐倉市立中央公民館
編　　集
なかま編集委員会
〒285-0025
佐倉市鏑木町 198-3
電話（043）485-1801

小指の思い出---------- 田中　育子
北スペイン紀行 サンセバスチャンでバル巡り　松村　謙二
小説「平成三十年」著者堺屋太一を偲ぶ　若岡　照秋
人間ケインズ---------- 泉　慎一

歴史・時代小説に心惹かれ

橘髙　芳敬

私が、「歴史小説」に熱中したのは、友人から薦められた司馬遼太郎の『播磨灘物語』を読んでからである。豊臣秀吉の軍師と云われた「黒田官兵衛」を描いている。

歴史上の人物を主人公にして、その人物や取巻きの家臣・戦の背景や真相等、史実を丁寧に研究・調査し作品を作り上げており、その緻密さと発想力や展開力に感動するばかりである。それ以来司馬遼の作品の魅力に惹かれ数多く読んだ。

『国盗り物語』は、織田信長の居城「岐阜城」を舞台にした小説で、読むうちに趣味の「城巡り」に拍車がかかり、その時代に生きた武将達のことを思い、時代背景や戦の内容等を紐解きながら数多くの城郭を訪ねた。

新幹線で名古屋から大阪に向かう右側に「関ヶ原古戦場跡」の看板が見える。司馬遼の『関ヶ原』の舞台である。徳川家康と石田三成の天下分け目の戦いである。今までに４回訪れた。東軍・西軍の各陣営の置かれた場所を巡ったが、後の明治政府の軍事顧問ドイツ人のクレメンス・メッケル少佐は布陣図を見た瞬間に西軍の勝利を即答したと言われるほど、山や丘を巧みに活用した「鶴翼（かくよく）の陣」を構えていた。現地で、西軍三成の陣「笹尾山」と東軍黒田長政の陣「岡山」から臨むとその言葉が理解できる。

この戦は、小早川秀秋の裏切りにより東軍を勝利に導いた。関ヶ原の合戦により日本の歴史は大きく動いた。信長から家康に至るまでの間の、各大名の心の動きや駆け引き、取巻きの武将や女性たちの言葉や心の葛藤等が手に取るように描かれており、司馬遼作品が喝采を浴びる所以であろう。

その後も他の作家の戦国武将物や軍師物を数多く読破したが、最近は「時代小説」を読むことが多い。歴史上の人物を配しながらも主人公を庶民や下級武士とし、その哀歓を描いたものが多い。池波正太郎や藤沢周平等の「剣豪小説」「捕物帖」などの作品も熱中して読んだ。

退職後は時間のゆとりもあり週一回の図書館通いが日課となっている。

最近先輩から、「葉室麟（はむろりん）の小説は面白いぞ！」と薦められた。挑戦してみようと思っている。

（編集委員）

石田三成陣地史跡
（笹尾山）

小指の思い出

「あなたが噛んだ小指がいたい…」何年か前に流行った甘い歌声を今もおぼえている。だが、私の小指の思い出は、そんな甘いものではない。ちょっとしたはずみで、小指を骨折したことです。

その日は、来客と一緒に楽しい酒宴であった。おわりごろ立ち上がり、用事をすまし振り返りざま、床に右手甲をついてスッテンコロリ。来客の前で、痛かったけどテレもありニッコリ笑って見送った。翌日、整形外科医で診察を受けると骨折と診断されショック。レントゲンを見ると手首の付け根から五本の骨が写し出され、小指につながる甲の骨が、たしかに、ななめに折れているスジが見える。正しくは、「右第五中手骨骨折」というそうだ。打撲の薬を塗られ、小さなプラスチックのギプスが手の甲をくるむように包まれた。

たかが小指と強気でいたが、どうも痛い。普段小指なんていつも使っていないのにと思ったら、そうはいかない。箸はつかえない。ビンの蓋が廻せない、タオルがしぼれない。長いこと使った右手なので、それでは少し休ませてあげようと、左手の出番にしたが、またこの左手が一向に役にたたない。食事の時は、フォークやスプーンで幼児型になったが、どうも納豆をかきまぜることや、お蕎麦を食べるのはやや抵抗があった。

そんなわけでしばらくは、なまけついでに掃除などはなるべく省略。やっと右手でお箸をつかえるようになったのは、一か月もあとだ。

これで感じたのは、小指も身体の一部で、大切であることがわかった。コユビちゃんゴメンナサイ！私の小指の思い出でした。

（最上町　田中　育子）

小説『平成三十年』
―著者 堺屋太一を偲ぶ―

昨年、平成30年になったのを機に、堺屋太一の『平成三十年』を読み直してみた。

本書は、平成９年朝日新聞に連載、その後、平成14年に単行本として刊行された。上巻「何もしなかった日本」下巻「天下分け目の改革合戦」と題し、平成30年の日本を予測した小説である。

主人公の木下和夫（産業情報省調査課長、43歳）の生活を通して、平成30年の日本の姿を描いている。

平成30年の日本は、八方ふさがりの状況にある。円安が進んで１ドル２５０円、国際収支は５００億ドルの赤字、国の収支は大幅に膨張して３０７兆円に、そのうち77兆円は不足していて国債に依存している。消費税は12％で、さらに20％へと引き上げられそうである。

日本の主役は、戦後生まれのベビーブーマーだった。かつて、この世代を「団塊の世代」と著者は名づけた。そして、今や生産年齢を脱しつつある団塊の世代に焦点をあてて、この本を書いている。平成30年には、団塊の世代は老いつつあり、日本も老いつつある。日本の発展は、世界史の中のちょっとした出来事だったのだろうか。

著者はこうも言っている。『「予測小説」は警世の書である。従って、ここでは「あって欲しくない未来」を描く。私（堺屋）にとって、平成30年に「最もあって欲しくない日本」は、「何もしなかった日本」だ。本書では、まず、この状況が今後も続くことを想定して、十数年後の日本を現実的に描くように努めた。』

著者は平成30年の日本を予測したが、平成の元号も、また、本人の生涯も、平成30年と共に幕を閉じてしまった。

（王子台　若岡　照秋）

北スペイン紀行

サンセバスチャンでバル巡り

最近サンセバスチャンという地名をよく耳にする。世界一の美食の街で、ピンチョスという小皿料理が並ぶバルをはしごするらしい。ここなら、かねてより思いを馳せていたスペイン巡礼の旅のフランス側起点に近く、語学学校に通えばスペイン語も少しは上達するかも。そして、妻の目を気にせず毎日バル巡りだ。一石三鳥とはこのことか。

6月2日、列車を降り歴史を感じる街をホームステイ先に向かう。ここで2週間生活すると思うと胸が高鳴った。

語学学校の授業は一日3時間だが、終わるとグッタリだ。夕食時には、ホストマザーが色々と話しかけてくる。お陰で、街に出ても会話に臆することは無くなったが。

授業を1時に終えると、市街に100軒以上あるというバルを覗いて回る。どこのカウンターにも、多彩な素材を組合せたその店独自の小皿が所狭しと並び、色どりや盛付けは眩いばかりだ。私のお気に入りはヒルダと呼ばれる、オリーブの実とアンチョビと酢漬けの青唐辛子を使った定番の物だが、地元の微発泡白ワイン「チャコリ」と抜群に相性が良い。他に旨そうな二品を頼んで、1300円程だ。

ホスト先の息子が作る料理は絶品だ。厳選した旬の素材を使い、その旨味をうまく引き出してる。この地方の男は、皆プロ並みだ。週末の夜には、親子で馴染みのバルに案内してくれた。どの店でも自慢の一品を試したが、美味いの一言。私は、地元のもう一つの有名な赤ワイン「リオハ」を飲みながら、これが一番経験したかったことだと思った。夏のスペインの夜は、9時を過ぎても陽は沈まない。

（臼井田　松村　謙二）

人間ケインズ

ジョン・メイナード・ケインズという、英経済学者として有名な人物を調べたことがある。彼は経済誌の編集や銀行業、政策担当にも携わったことがあり、多面的な「実務家」の印象が強い。そして時と状況に応じて持論を変更する「柔軟な思考」の持ち主でもあった。

彼の社会人生活のスタートの場は（日本のキャリア官僚にあたる）国家公務員であった。当時の文官試験に1位で通った者が大蔵省を選択したため、2位のケインズはインド省に就職した。学生時代から国家公務員時代にも哲学の研究を継続しておりインド省在職中に一度フェロー（ケンブリッジでの研究員）資格申請論文が棄却されるが、インド省を退職してアルバイトの講師をしながら研究に集中して論文を再提出して認められ、フェローの職に就いた。

その後紆余曲折があり、政府からパリ講和会議へイギリスの大蔵省代表として派遣されるが、列強のドイツへの過酷な要求に反感を持ち条約成立後の36歳を迎えた誕生日に大蔵省を辞任している。直後に『平和の経済的帰結』（1919）という著作を出版すると、同著作は主に英米でベストセラーとなった。内容は条約成立に関わった有力者たちへの痛烈な批判と同条約への代替案の提示であった。この時事論家としての成功により彼は公的機関に数年戻ることができなかった。さらに後年には、『戦費調達論』という著作も発表している。実のところ、彼がどのような信条を持っていたのかは研究者でも分かれている。しかしながら、多方面で活躍した興味深い人物であったことには異論がない。

（表町　泉　慎一）

１０月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の２ページと３ページは佐倉市民の皆さんから投稿いただいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。**「趣味」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」**など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650 字程度（14 字×47 行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等修正させていただくことがあります。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館　TEL: 043-485-1801　FAX: 043-485-1803
〒285-0025 佐倉市鏑木町 198-3
E-mail: chuo-public@city.sakura.lg.jp
URL:http://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/16-1-0-0-0_1.html

『なかま』は佐倉市民カレッジの学生と卒業生で構成される編集委員が編集を行っています。

さくら道

印旛合同庁舎を左に見て、２９６号線最初の信号を過ぎた左側にファミリーレストランがある。その反対右側は田畑になっており、一部休耕田を利用した蓮田がある。

例年、７月中旬から８月中旬頃まで白花の蓮が一斉に咲き出す。早朝散歩時に廻り道して見に行く。白花一色の中に僅かだがピンク色の花が混っている。それを見るのも大変楽しみなものである。

それより早く６月下旬には佐倉城址公園の姥が池の睡蓮の花も白一色で池全面に咲き誇っている。こちらも散歩の寄り道としてコースに入れている。これだけの規模の白花睡蓮池は他に見た事がない。

いずれにしてもこの時期、白花の蓮と睡蓮が見られることは大変幸せである。

（田中　敏雄）

あとがき

山形県の鶴岡へ夏休み中の小五の孫を伴って、成田空港・庄内空港間に就航したばかりの航空便で出かけました。

鶴岡は庄内藩14万石の城下町で、私の主目的は国指定史跡「庄内藩校致道館（ちどうかん）」の見学です。東北では現存する唯一の藩校で、表御門、聖廟（せいびょう）、講堂、御入間（おいりのま）などの建物と展示品をじっくり見ることができました。

「佐倉藩校　成徳書院」は現在の佐倉市民体育館の位置にありましたが、平面図は残されているものの全体像をイメージしにくいので、庄内藩校などの現存施設を参考に鳥瞰図の制作を模索しているところです。

孫の主目的は鶴岡市立加茂水族館クラゲドリーム館です。クラゲの展示種類数世界一を誇る空間に癒されるなど、楽しい夏の旅でした。

（林　義之）